

植物と人々の博物館メールマガジン

第 119 号 2025 年 2 月 4 日発行



~~~~~  
ロウバイは満開、スイセンやキヌサヤエンドウも咲き始めました。春が早いようですと書いていたら、今週は大雪になるようです。

これから、この人新世はどうなっていくのでしょうか。重大な変曲点にいるのだと思います。今ここにある危機を社会の中堅層の人々が見ないことにして、金縛りになっていてどうするのでしょうか。インゴルドは先住民の人々のように、世代の分断を造らずに人類学や哲学の学びから、共に生きることを提唱しています。AI に支配されずに、心ある人間として生きたいです。

植物と人々の博物館は社会的共通文化財である植物標本、民具、文献資料や書籍を整理して、森とむらの図書室を充実し、連携しているタイ・日本自然クラブの展示も再開したいです。ご利用くださり、整理もご一緒に手伝っていただければありがたいです。できることなら、これらの資料は公共の場所を確保して、広く公開し、ご活用願いたいです。借用中の倉庫はすでに雨もりしています。電気・水道などは有りません。

## 1. 植物と人々の博物館

○開館・作業予定日：3月9日から月何回か開館します。さく葉標本を選別し、民具、書籍の整理を行います。公共の知的財産として活用していただけるように、ご協力いただけると嬉しいです。ご協力いただける方があれば曜日や日時は調整できます。また、資料など閲覧したい方はご連絡いただければ、日程調整してご案内します。担当 木俣 [kibi20kijin@yahoo.co.jp](mailto:kibi20kijin@yahoo.co.jp)

### 主な作業：

- ①書籍 8000 冊・環境教育などの資料・書籍の整理、インドの関連書籍も多い。
- ②日本、インド、タイなどの民具の整理
- ③展示の企画：たとえば、タイやインドの民具、自然文化誌研究会（学大探検部）50 年記念記録
- ④インド亜大陸、中央アジアの植物腊葉標本整理、台紙に貼る作業など、
- ⑤その他

### ○報告

- ①50 周年記念企画を話し合っています。
- ②木俣文庫の日本語書籍は大方、3 月中に寄贈します。訪問国で集めた外国語の書籍や文献も『Essentials of Ethnobotany on Millets』を書き終えたら、1～2 年の内に寄贈します。

## ○予定

### 1) 講義などの依頼

#### ①講座『里山再生ボランティア入門』

日時：2025年2月9日

木俣担当 自然文化誌研究会/植物と人々の博物館

「1970年代の檜原村の雑穀調査から～人間と穀物の共生、文化的進化を学ぶ」

場所：桧原村藤倉、NPO法人さとやま学校・東京

<https://satoyama-gakkou.org/field/>

#### ② 新渡戸文化高校2年生探求学習

日時：2025年2月19日水曜日 14:00～17:00

話題：探求学習で、雑穀に関するインタビューを受ける

#### ③次代の食と農をつくる会/講座 zoom

日時：2025年3月5日 19:00～20:30

話題：日本の雑穀の歴史、調理方法、魅力など

2) 民族植物学ノオト第18号は2025年3月末に発行する予定です。随筆など何でも、至急、ご寄稿くださると嬉しいです。すべての記事 pdf は植物と人々の博物館ホームページ（下記：ミュージアムグッズの項）で読めます。意外に相当数の方々が読んでくださっています。 <http://www.ppmusee.org/goods.html>

### 3) 電子書籍：

編集子の自選集 IV『雑穀の民族植物学—インド亜大陸の農山村から』は、順次、ネット上で公開してきました。誤字、脱字、誤変換などは、年度内にもう一度、確認、修正します。穀物に関する新たな栽培起原と伝播仮説および未来への提案をします。これで、小生の研究記録はほとんど公開しました。自選集全 VI 巻のまとめとして、日英文要約版（第5巻“Essentials of Ethnobotany on Millets ~Their Origin and Dispersal around Indian Subcontinent”）を書き始めています。あと数年頑張ります。同時に、自選集 III『日本雑穀のむら』の補足として、40年前の北海道調査における開拓農家やアイヌ民族の人々などとの対談テープの文章化を進めています。自選集 VI『随筆集—生き物の文明への黙示録』や句集に順次新作を追加しています。

4) 公式 HP：植物と人々の博物館 <http://www.ppmusee.org/>に含めて民族植物学関係 HP:生き物の文明への黙示録 <https://www.milletimplic.net/>も国会図書館インターネット資料収集保存事業 (ndl.go.jp)で毎年1回7月20日頃に収録されています（すでに5回登録済）。すべての記事は無料で公開しています。国会図書館の文献録には博士論文や科学研究費報告書などまでが集成されており、ここに保存されている記事は記録として残りますので、とてもありがたいです。

5) 森とむらの図書室への寄贈など 現在所蔵する書籍や文献を整理して、ご利用していただけるように、蔵書リストと閲覧書架を整理充実しています。国内外の調査時におけるフィールド・ノート、スライド 35mm など、こちらに置きます。リスト作りや番号貼りなど、ご協力いただけるとうれしいです。

<https://www.milletimplic.net/forestvil/forestvil.html>

## 6) 雑穀栽培

簡単な栽培や加工、調理法などは下記にあります。不明なことがありましたら、メールください。

栽培法 [雑穀 ～とりあえずの栽培法 \(milletimplic.net\)](#)  
[farmsklec8p.pdf \(milletimplic.net\)](#)

加工法 [雑穀類の加工方法 \(milletimplic.net\)](#)

詳細は『日本雑穀のむら』『雑穀の民族植物学』を検索してお読みください。

## 7) 植物と人々の博物館基金 PPM Foundation

大口寄附ではなく、できるだけローテクで貯金箱に眠っている 1 円玉からする任意募金をお願いしています。これまでにゼミなどの会場で多くの方々からのご協力をいただきました。ありがとうございます。将来に向けて、植物と人々の博物館へのご寄附あるいは整理作業のご協力を、よろしくお願いします。自然文化誌研究会に基金費目を設けました。標本、民具、書籍などを社会的共通文化財として公共の施設で保存・公開するために、費目指定でご寄附をいただけるとありがたいです。今のところ、上野原市西原のびりゅう館に森とむらの会文庫を一括貸し出しています。他に数名の方に、まとめて関係資料を貸し出しています。

これまでに、多くの方にご寄附を頂き、感謝しています。今回は河口さんに成合基金と植物と人々の博物館にご寄附をいただきました。ありがとうございます。

郵便振込口座は下記です。

口座名義：特定非営利活動法人自然文化誌研究会

口座番号：00100-2-665768

## 2. 自然文化誌研究会 (学大探検部：東京学芸大学自然文化誌研究会冒険探検部)

○予定の詳細は下記ホーム・ページをご覧ください。

1) 総会は、2月17日 19:00～

2) 自然文化誌研究会(東京学芸大学冒険探検部)は来2025年に創立50周年を迎えます。今までの活動履歴を示す資料集をまとめています。とりあえず、下記で資料の一部を公開しています。ちなみに大学探検部は全国に20ほどはあります。

<https://www.milletimplic.net/archives/historyinch2025.html>

来年は創立50周年ですから、企画ワーキンググループで話し合いを重ねています。『50年史』をまとめるとか、50年間に関わった人々と思いを語り合う会とか、

企画が進んでいます。環境学習セミナー、公開講座、冒険学校や農学校、関係市民も皆さん、何万人もが場と時を共有した東京学芸大学彩色園で、1泊2日を過ごします。学大環境教育研究センターの了承も得られています。

詳細はまだ未定ですが、おおよその仮案です。

日時：2025年10月4日（土）～5日（日）、1泊2日

話題：未定

場所：東京学芸大学彩色園など。仮承認を得ています。

内容：写真展、談話会、50年記念誌の発行などを検討中。

### 3) 50周年記念の前企画のZOOM座談会の検討案

担当：自然文化誌研究会/植物と人々の博物館（創立2006年）

日時：2025年6月21日（土）、10:30～16:20 予定

場所：ZOOM 100人程度

対象：自然文化誌研究会、植物と人々の博物館、冒険学校、エコミュージアム日本村、雑穀街道、ちえのわ農学校、ログビルダー、タイ・日本自然クラブ、冒険探検部他関係者、大学探検部ほか、関心ある誰でも参加を歓迎します。

広報：ナマステ、メルマガ、ホームページなど、ロコミでお知らせします。

内容：

10:30～12:30

木俣美樹男（またやん専任研究員、博物館担当運営委員、東京学芸大学名誉教授）

①学術探検の系譜～植物の栽培化過程と伝播＜フィールド・ワークの成果＞

②環境学習における心の構造と機能の文化的進化＜冒険学校の成果＞

③学生たちの探検活動＜冒険学校以前＞

\*昼食自由談話 12:30～13:00

13:00～14:30 以下は検討中

①エコミュージアム日本村、雑穀街道などの実践活動；エコミュージアム日本村、ログビルター、山梨県小菅村での実践

②東京都五日市町から埼玉県大滝村、神奈川県藤野町まで、および雑穀栽培講習会の実践

14:30～16:00

冒険学校、環境学習セミナーなどの実践活動 ＜環境学習による心の発育＞

①西原調査から冒険学校の始まり、二風谷冒険学校

②タイ・日本自然クラブの合同キャンプ

③冒険学校と現代教育の思潮

16:00～16:10 挨拶・謝辞

### 3. 環境学習市民連合大学 Civic United University for Environmental Studies

環境学習市民連合大学は環境学習の理論と実践を普及啓発する目的で、ウェブサイトを作っています。環境学習・保全NP04団体と3個人から出発した市民大学です。主旨は、市民社会の自由、平等、友愛を基本原則として、自らが学び合う環境学習市

民連合大学をリンク・ページとして、インターネット上で運営することです。ヨーロッパの12世紀ルネサンスの先駆けとなった原初の大学は学び合いたい人々の学習者組合でした。都市を旅しながら教師も学生も互いに学びの自由を守護し合い、共助していました。入学資格、試験、授業料、卒業資格はありません。どなたでも、学び合いたい人々が自由に集まるのです。アーカイブは次にあります。

<https://www.millettimplic.net/university/civicuues.html>

~~~~~

植物と人々の博物館 (山梨県小菅村) :

館長：木下善晴、顧問研究員；安孫子昭二

研究員：木俣美樹男 (東京、専任研究員、担当運営委員)、西村俊 (石川、担当理事)、井村礼恵 (東京、担当運営委員)、川上香 (長野)、渡辺隆一 (長野)、Sofia M. Penabaz-Wiley (千葉)、伊能まゆ (ベトナム)、大澤由実 (神奈川) ほか

公式 HP：自然文化誌研究会/植物と人々の博物館 <http://www.npo-inch.ppmusee.org/>

事務担当幹事 メールマガジン発行：木俣美樹男 kibi20kijin@yahoo.co.jp

民族植物学関係 HP:生き物の文明への黙示録 <https://www.millettimplic.net/>

エコミュージアム日本村／ミュージズ研究会 (山梨県小菅村)：代表 亀井雄次 (山梨小菅村)

自然文化誌研究会：代表 中込卓男 (東京)、副代表 中込貴芳 (東京)、小川泰彦 (埼玉)
事務局長：黒澤友彦 (山梨県小菅村)

伝統知顧問：守屋秋子 (小菅村)、岡部良雄 (丹波山村)

~~~~~

## 編集子独り言：

希望ある未来を描くためには歴史的に事実を学ぶ必要があります。これら事実を記憶の穴 memory hole に放り込んでしまえば (『1984年』、J. オーウェル)、希望は創れません。自然文化誌研究会の野外教育セミナーから長年かかって創立した日本環境教育学会は著しく衰退、会員は半減しています。創立時の資料を貸し出した契機に過去を振り返ってみました。私は自然文化誌研究会の皆さんとともに、創業した者として、創立大会で自由な話し合いを保障する場にしたいと宣言しました。しかし、事実と反する過去と現状の認識がなされているようなので、学会で話す機会をいただきたいと言ったところ断られたので、見かねて11年ぶりに再入会し、先達たちの業績を伝え、役立ちたかったです。しかしながら、あるアンフェアな理由で、協力できないと言われ、実際、友人にも圧力がかかり、誰も課題研究には参加しませんでした。老人の好意 (行為) は余計なお世話であったようです。不都合な事実は記憶の穴に放り込まれるように、事実を修正する資料として投稿した原稿は事細かに4ヵ月もかけて検閲されて却下されました。また、創業者として環境学習原論の到達点を希望の創造として投稿論文に提示しましたが、これも4ヵ月ほどして審査結果Cが来ました。これらの処遇は当初から小生の予測通りで、再投稿はしませんし、学会も退会しまし

た。これら2編は民族植物学ノオト18号に掲載します。学問の自由の尊重、この分野の創業者達（であり、自ら言うのは憚れますが、世俗における最高権威者）への敬意はまるでなく、学会派閥の保身では公正な学びの場とは言えません。衰退する学会のお役に立ちたいと、会員に復帰し、提案までしましたが、空回り、余計なお世話でした。すべてブロックされ、50余年の学問研究の成果はやはり記憶の穴に投棄されるのでしょう。

現職者は厚い本を読む時間、熟考する時間もなく、自由に書きたいことを書くことができず、これでは学問は深まりません。環境も子供たちの教育現場も今ここにある危機的な問題を抱えながら、学会が学問的に深く応対できずにいることは、あまりに情けないことです。

阪本師は孤高の農学者と評されていますが、小生は孤独な民族植物学者でしょうか。先達や師友に恵まれてきたので孤立はせずに、数多くのいじめや裏切りにあっても鬱病、さらに自殺には至らず、生きてきました。しかし、学問の自由は孤独になることで、熱中する遊びとして楽しめるのです。芸術も同じことです。学会や世間を慮って、保身のあまり中堅の人たちが現状追認で、足元をふらつかせていては、自由な学問、芸術の独創性は深まり、高まりません。海外の秀逸な著述を訳すだけでは、あまりに情けないです。このくにの知識俗人はいつまで舶来物を重んじる欧米の被植民地にいるのでしょうか。

世間でもてはやされている金やAI、世俗政治家が声高に言う革命や変革などとは、まるで異なった方向を目指してきて、世俗の流行に抗う変人奇人はこうした人生でよかったと考えています。この世の不易の伝統的な生活文化というゴールを守ることが、1大学人キパーの役割なのでしょう。効率コスト、タイプなど私利私欲で、子供たちをお荷物扱いにし、年寄りたちを蔑ろにし、若者たちと老人たちを分断、排除しないで、共に楽しく、幸せに生きましょう。T. Ingold（2023）も同様の意見を詳細に述べています。

このところ、伝統知顧問の秋子さんや岡部夫妻が相次いでテレビに出ています。一方で、小菅でお世話になった広瀬屋旅館のご主人、また、白沢の奥秋さんが他界されました。哀悼の意を表します。黒澤事務局長が代表してご弔問に伺いました。

## 写真

深大寺参道入り口の鬼太郎茶屋は街中に移転したようです。老朽化した建物が危険だからだそうです。壊れそうな家でなければ妖怪たちは住めません。ジャコロッケもなくなり、楽しみが減ったので、とても残念です。



ジャコロッケ売り場

深大寺のそば屋湧水、打ちたてのソバとソバガキ。エディブル・ウェイのエンドウマメの開花



野川の自然観察園内のスイセン群落とオオイヌノフグリ



### 参考資料：探検とは何か

長澤和俊（1969）より要約抜粋

15世紀末かに始まったヨーロッパ人の地理的探検は、20世紀の初め頃までに地球上のあらゆる地域を明らかにした。このために、これからの探検は、ある地域の内容や実態を明らかにするための探検となろう（第1型）。課題追及のための探検（第2型）はコムギの祖先を求めた木原均の中東探検、南米アンデスに初期文明の発掘を志した泉靖一の探検などである（川喜田二郎）。記録の競争の探検（第3型）は名誉を求めてのスポーツ的、冒険的である。

探検とはサイエンスとアドベンチャーの魅力に富んだカクテルである（フックス）。探検に冒険はつきものであるけれども、決して冒険をすることが探検の目的でも本来の姿でもない。探検とは人類が未知に向かってその真実を知ろうとする探求行動である。

学術調査は出発前にすでに調べようとするものが決まっており、いわば仮説の検証である。一方、探検はもっと全体的、全人的な未知の世界の調査である。探検と言うのは、やはり地球の上で、自分らの領域の外に秘密を求めていくのがその筋道だ（中尾佐助）。探検には冒険の要素が入ってくるのである。結局、探検とは人間が自然に対し、いかに不撓不屈の精神をもって戦えるか、その可能性と限界を見極めようという要素も入っている。（探検への）非難の大部分はむやみに他人にいいことをさせたくないと言った島国根性、日本の伝統的な思考形式による中傷なのである。

本多勝一（1998）は次のように言っている。素材がなければ、プラスにさせることはできない。探検は素材としての意味を持つのである。探検精神とはパイオニアの精神である。常に率先して新しいジャンルを切り開き、先鋒に立つ精神である。地域探検には、探検家の精神が誠実なヒューマニズムによって貫かれていなければ、決してその地域の真相を理解することはできない。ましてそこに住む人間の探検などは、とうてい不可能であろう。

梅棹忠夫（1959）は次のように言っている。冒険の否定という、日本において一般的に承認されている人生哲学の原則に合うからなのだ。探検は単なる冒険ではない。それは慎重な準備とさまざまな配慮の上に組み立てられた複雑な事業である。同時に、



根本において冒険的精神を含まぬような探検などと言うものが、意味を持つだろうか。一般的な人生の問題として、冒険を全面的に否定するような考え方が、健康さと創造力を持ち続けることができるものだろうか。同じ原理が、日本社会のあらゆる場面で、作用している。命令を守って危険を冒すことはあっても、自発的な意思で、未来に対して自分をかけるということは、日本では、始めからないのだ。

文献：

本多勝一 1998、本田勝一集第4巻、探検部の誕生、朝日新聞社、東京。

今西錦司編著 1952、大興安嶺探検、講談社、東京。

中尾佐助 2004、中尾佐助著作集、第III巻、探検博物学、北海道大学図書刊行会、札幌。

長澤和俊 1969 世界探検史、講談社、東京。

梅棹忠夫 1959、冒険的精神、朝日ジャーナル